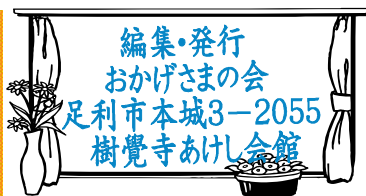


# おかげさま



ちょっと古びた感じの絵ですよね。ご覧になったことはないですかね。これは、七高僧さまの第五祖、唐の時代の善導さまの、「観無量寿経疏(観無量寿経の注釈書)」の中に出てくる、『二河白道

の喩』を一枚の絵であらわしたものです。

## 善導大師の二河白道の喩え

1. 旅人が、無人の荒野を旅していました。
2. 群賊悪獣ぐんぞくあくじゅうに追われて、死を畏れて西に向かいました。
3. 西に向かうと、水の河、火の河が突然として現れます。
4. 群賊悪獣に追われて、帰るも死、とどまるも死、先にゆけばまた水火の二河に落ちて死んでしまう。
5. 旅人は、そこで、どのみち行き場がないのなら、むしろ前に進んで行こうと決心をします。
6. 東の岸に、この道を進めと勧める声と、同時に西の岸にいる人が「直ちに来たれ」と喚ぶ声をたちまちに聞きます。
7. その声を聞いた旅人は、疑いや恐れる心がなくなり、白道を進んでいきます。
8. 白道を進み始めると、群賊悪獣が「帰ってこい」と誘惑ゆうわくします。
9. それらの声まどに惑わされることなく、旅人は白道を進み、西の岸に着きました。



これは、私が今人生を歩むとき、悔いのない人生・空しくない生き方・生まれてきて良かったという歩みができるようにと、善導さまが示された喩であります。源空さま、そして親鸞さまがお勧めくださっている生き方であります。

まず、自分が生きていることを意識して大切に生きなければ、私を支えてく  
ださっているご縁、「おかげさま」に申しわけないのではないのでしょうか。

村上志染の詩に、「水馬」があります。

ほういっしゃく てんち  
方一尺の天地

みずすまし えん えが  
水馬 しきりに 円を描ける

なんじ  
汝 いずこより来たり

いずこへ旅せんとするや

へい いそが 忙しおましてな!



自分の何者であるかも知らず。ましてや、どこから来て、どこに行こうと  
しているのかも知らず。ただ、忙しい忙しいを口癖くちぐせに時に流されていくとし  
たら、30しほうヶ四方の水たまりをわが天下と思ひ込んで、忙せわしなく、ぐるぐる  
と回っている水馬と、何ら変わるところがないのではないだろうか。

善導さまの「二河白道の喩」の説明の箇条書き、薄々うすうす(2)を感じながら  
(1)を抜け出していないってことですね。生死出べき道しょうじいずを求めようとして  
いないのだから、生死の現実じやうじつに目が向いていない実感じやうじつしていないのですよ。

恋する乙女おとめじゃないのですよ、「花のいのちは短くて…」なんて。

現実が意識されてこないんですね、「貪瞋二河とんじんにか」の現実が。自分にとって  
都合つごうよいものはどん欲どんよくにもっともっとと右手みぎてで搔き込み、都合つごうの悪い嫌いやなも  
のは怒りと共に左手ひだりてで撥ね退けて生きている現実じやうじつの姿に出会っていないから、  
抜け出そうという気きも起らなければ、抜けてゆく白道はくどうも見えてこない。

忙しい忙しいと、娑婆しゃばの縁えんの尽つきるまでダダ走り。その時、こんなはずじゃ  
なかったでは、もう手遅れておくですね。

どなたの言葉でしたか、「人間、生きてきたように、死んでゆく」。

お浄土じやうどに往ゆくには、往生浄土おうじやうの歩みの外には決してありません。富士山に  
登るには、富士山の登山道ののぼを上るしかないでしょ。

言われてもなかなかできない、横着おうちゃくな私の根性こんじやうを知っているから、「仏  
予かねてて知ろしめて」と私の「往生浄土じやうどを定め」てくださったのです。私の歩む  
べき道みちを選び取りお勧めすすめくださっているのです。親鸞しんらんさまは、これしかない  
よと、先頭せんとう立って歩まれたのです。 <<南無阿弥陀仏>>

あけし酔話

山本仏骨和上は、温泉津の西楽寺の菅原真成住職(当時)よりうけたまわってお話として次のように記しておられます。

あるとき、西楽寺に大法要がつとまり、本堂には五、六百人のひとが、ぎっしり詰まっていました。そのときのご講師は服部範嶺<sup>かんがく</sup>勧学で、熱心に法話をなされたが、最後に、

「ご信心の決まるのは、宝くじの当たるようなものじゃ、さあ、誰に当たったか、今からその当たった人の名をいうで、よう聞きなさいや……」と結んで、ご文章<sup>ぶんしょう</sup>を取り上げ、「末代無智<sup>まつだいむち</sup>の在家止住<sup>ざいけしじゅう</sup>の男女<sup>なんによ</sup>たらんともがらは……」とおもむろに読みあげられました。

それまで高座<sup>こうざ</sup>の下でじっと頭<sup>こうべ</sup>を下げて拝聴<sup>さいちやう</sup>していた才市<sup>さいいち</sup>さんが、ここですっと立ち上がり、両手を高く差し上げて、「当たった！当たった！当たった！」ときりきり舞いして喜び叫んだ。それこそほんの一瞬のできごとで、高座の上の和上さんは、ご文章の拝読を中止し、両手を膝に置いて頭を下げておられるし、講堂の参詣人は、顔を一斉<sup>いつせい</sup>に才市さんの方に向け注目していた。これは才市さん自身が、しようと思っただけのことではなく、思わず知らずそうなった、無我の動作であったといわねばなりません。

やがて、才市さん自身、ご文章を中止しておられる和上さんや、一斉に自分を見つめている大勢の参詣人の注目に気付いたと見えて、恥ずかしそうにもじもじしていたが、またそのままずっと座り、頭をさげてご文章の続きを拝聴していたということです。——菅原真成先生はその時のことを語り、ほんとうに有り難い光景であったといわれました。

才市さんにして見れば、ご信心が当たった人の名をいうとおっしゃるから、「さて誰の名が出るか、もし自分の名がなかったらどうしよう……」と案じながら真剣に聞いていたに違いありません。それが真っ先に、「末代無智の在家止住の男女」といわれたから、ああ、わたしの名があった。わたしに当たったと知らせておって下さるのだと受けとったものですから、嬉しさあまって、おもわず飛び立ったのでしょう。

問題はここにあるといわねばなりません。私たちはこのご文章を何千返、何万返聞いているかもしれませんが、それがわたしの名前だと受けとったことがあるのでしょうか。ご信心は、仏からいえば一人残らず、みんなに与えて下さるのです。そして「末代無智の在家止住の男女」と呼びかけていて下さるのです。けれども、それがわたしの名前だと受けとれぬところに、性根<sup>しょうね</sup>が入らなかったのです。

親鸞<sup>ごこうしゆい</sup>聖人が「弥陀の五劫思惟<sup>あん</sup>の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞<sup>いちにん</sup>一人のためなりけり」と仰<sup>おほ</sup>せられたことを、才市さんこそ、本当に聞いた人だったのでしょう。そこに妙好人<sup>みょうこうにん</sup>といわれるゆえんがあるのだと味わわれます。

(いわみ 石見の才市顕彰会編『妙好人 石見の才市』)



# あけし あれこれ ザクロソウ (柘榴草)

一変して秋当来<sup>とうらい</sup>という感じです。スーパームーンは大きなお月さまで美しかったですね。庫裏<sup>くり</sup>の前に生える小さな草があるのですが、丈も低くて、華奢<sup>たけ</sup>な細い<sup>き</sup>茎に小さな葉と本当に小さな花が、寄り添<sup>そ</sup>って咲きます。秋とともに葉が紅葉<sup>もみじ</sup>してきて、モヘアの敷物のやうに何ともきれいです。名前が解<sup>わか</sup>らず、時あるごとに調べていました。それがやっと見つかりました。



## ザクロソウ (ザクロソウ科) 石榴草<sup>ざくろそう</sup>

### 別名 スズコクサ・モモグサ

名前の由来<sup>ゆらい</sup> なめらかな<sup>だえんけい</sup>楕円形で光沢<sup>こうたく</sup>のある葉がザクロの葉に似<sup>に</sup>ていることと、熟した果実が裂<sup>さ</sup>けて中の種子<sup>たね</sup>が見えることもザクロの実を思わせることから、「石榴草」と名付けられた。

畑<sup>ろばた</sup>や路傍<sup>あぜ</sup>、水田の畦、庭先など、日当たりのよい乾燥した土地によく見られる。攪乱<sup>かくらん</sup>を受けやすく、他の植物が定着しにくい場所を好み、草丈の大きな植物が定着してしまうといつの間にか消えてしまう。

高さ10～25cmほどの小型の1年草。全体無毛で、茎はやや光沢があり、3～5輪生するが、上部の葉はときに対生。夏から秋にかけて葉腋<sup>ようえき</sup>から細い花柄を伸ばし、花をつける。花卉<sup>かべん</sup>はないが、径0.5cmほどの黄緑色の5枚の萼<sup>がく</sup>が花のようにみえる。果実<sup>じゆく</sup>は球形で熟すと果皮が裂<sup>さ</sup>けて種子<sup>たね</sup>がのぞく。

